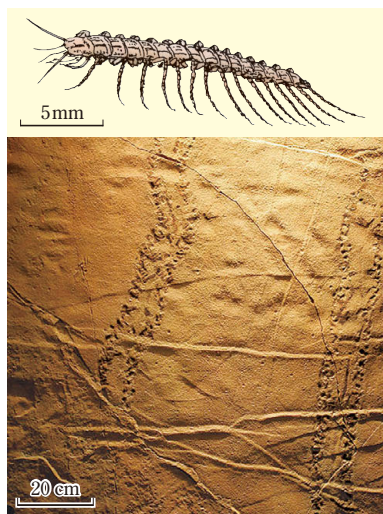


▲図 23 カンブリア紀前期末の浅海礁の生物

たコノドントは、地質時代ごとの形態変化が急速だったため、古生代と中生代三疊紀について細かな時代区分ができる重要な示準化石として利用されている。

●陸上への進出● カンブリア紀に続くオルドビス紀には、温暖な気候のもとで生物の多様化が本格化し、ほぼ古生代の生物の多様性のピークに達した。古生代前半の海では、特にフデイシ(筆石)が栄えた。またケイ質の殻をつくる単細胞プランクトンである放散虫も種類が多くなった。一方、陸上では節足動物が水辺の堆積物に足跡を残しており、生痕化石として見つかった(図 24)。これは、動物の最初の陸上進出を記録している。脊椎動物では、魚類から四足をもつ両生類がデボン紀に分かれた。その 1 つであ



▲図 24 最初に陸上進出した節足動物の生痕化石(下)と節足動物の復元図(上)